

幼児の言語發達についての一考察

東京学芸大学附屬幼稚園 角 尾 和 子

幼児の言語發達のうち「話の理解」について与えられた話がどこまで解るかを実験的に調べています。既に「幼児の教育」第五十二卷第十号に報告しましたが今回は昭和二十九年五月十八日に調べた結果の報告であります。

○話材 お話百選の中、かしばいさむ作、びっくり蛙。(およその筋は表の上段1から18まででわかると思う。)

○調査方法 びっくり蛙の話のテープレコーダーにふきこむ。

四才児を中心とする年少組、五才児を中心とする年長組、の二グループにわけてその話を聞かせる。その時あとから今の話をしてもらうと云っておく。

子供達が聞き終るとすぐにチリチリにわかれ、幼児一人に一人ずつ学芸大の幼稚科学生がついて、聞いたばかりの話を再生させ記録してもらおう。この場合学生には必要なこと以外は子供に話をしない、特に話をむりにひき出す態度をさけるように話しておく。

○調査の結果

18にわたった一つ一つの部分については、その部分の意味がわかる程度に記録されているものならばそれとります。

(森の中に小さい池がありました。という部分の再生が出来たものが、年長組二六人の中一六%、年少組五人の中三九%である……このように表をみます)

△このグラフから山のひくい部分、即ちおぼえていない部分をひろうと1、2、6、9、12、で特にその前後とくらべて6と9はひくい。

山の高い部分をみると4、5、7、8、10、11、でいわゆる話の山になり子供もよろこんで笑い乍ら聞いていた所である。

△事件のおこった場所、天気模様、登場人物の説明など抽象された言葉であらわされたいわば仮想の場面は子供達にわかりにくく、特に年少のものはわかりにくい。

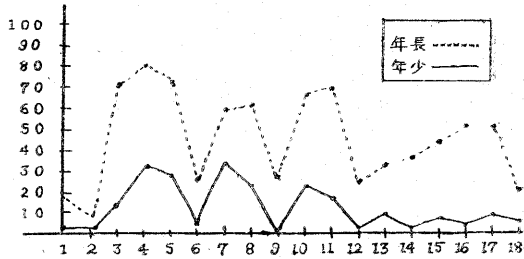
2) S. 11 調

(びっくり蛙)

第一表

- 1 アハハとゆうました。
- 2 大きい蛙がこぼれた。
- 3 中ぐらいの蛙がこぼれた。
- 4 小さい蛙がこぼれた。
- 5 猫、犬と牛が歩いてく。
- 6 小さい蛙と中ぐらいの蛙と大きい蛙が水の中へ、顔を出す。
- 7 しゃぶくして(水の中にもぐって)
- 8 大きい蛙がジャンと水の中にとびこんだ。
- 9 体が木のかげを歩いていった。
- 10 大きい蛙がこぼれた。
- 11 中ぐらいの蛙がジャンと水の中へ、とびこし、
- 12 大が木のかげを歩いていった。
- 13 中ぐらいの蛙と大きい蛙がこぼれた。
- 14 小さい蛙がジャンと水の中にとびこも。
- 15 中ぐらいの蛙と大きい蛙がこぼれた。
- 16 三匹(小、中、大)の蛙がひなたぼっこしていた。
- 17 小さい池
- 18 よい天気

年長 (26人) 16 9 632 807 730 230 576 675 230 653 692 230 317 346 403 590 610 112
 年少 (51人) 39 39 136 313 274 39 335 215 19 236 196 19 78 39 58 39 78 39



△子供達はじかに登場人物が動き活動する場面から話の再生をはじめ
 めている。このことは仮想場面の理解度が低いこととあわせて子供
 達の興味のありかを知る一つの材料でもある。

△この話の演出手引に年少むきとされ、年よわのものが失敗をした

この質問二つから次のような結果をみた。
 ・正しく論理的な答と認められた「こわくないと思った」「おどろ
 かなかった」等という答が、
 年長組 13人 50%
 年少組 10人 20%

(びっくり蛙)

第二表

	18点満点として		100点満点として	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年長	7.85	4.26	43.3	
年少	2.27	4.42	12.2	

ということはそのことを理解しているか、していないか、この話の記録後次の質問をしてみよう。

質問1 小さい蛙はなぜ池の中へとびこんだか。
 質問2 そのときどうしてほかの蛙はとびこまなかったか。

時に、大きい子供は笑ってはいけないといましめる話をするのに使うとよいものについて。
 これを調査に関連させてみるなら、子供達の記憶の再生の少い部分即ち、6、9、15、16、17、18、の部分に意図するものをもっているということが云える。

そこで再生がないと

・全然わからない

年長組 4人(26人中)

年少組 13人(51人中)

・其の他の答は話を表面だけしか聞いていない又わかっていないように
うで次の通りである

ほかの蛙の所へはこなかった

ほかの蛙はみていたの

あとから驚いたの

つぎつぎ驚いた

猫一人きりこないから上等何もあたらなかった

△この結果から中と大の蛙がとびこまなかった理由がわかった。年長の50%と年少の20%の子供達には、中と大の蛙が笑った意味がわかった。云いかえればその事柄や事態がのみこめたといえる。然しこのりの子供達にはわかりにくいのですからこの部分にアクセントをおいた寓話としての意図は達せられていない。子供が笑って聞いていてもそれは話の表面的なおもしろさにつられていだけであり、内面の子供の思考作用にふれる面の理解はこの程度のものである。強いて何かをいいたい場合にいろいろ話の中におりませることもわかりやすくするために大切であるが、端的にあらわす言葉で更につけ足す必要もあるように思う。

△この調査整理の際に面白い事例にぶつかった。それは年長組のグループに多くあらわれたことであるが。

5と4、8と7、11と10をいれかえて「小さい蛙がじゃぶんとと

びこんだの。猫が木のかげをあるいていったから」という形で再生している例が

年長組に14例(26人中)

年少組に2例(51人中)

あった。

このことはひっくりかえした形でおぼえたというよりは、よりよくその意味を理解していると解すべきでしょうし、又年令のすすむにしたがって結果をさきに、更に事件の原因をとというように話をてぎわよく再生できるようになるといえよう。

これは「幼児の言語発達」牛島先生森脇先生御研究の文章の構造第五節従属文に「文章の複雑性を通じて言語の完成の時期を伺うために理由の「から」を伴っている従属文の頻数を手がかりとして調べた」とあり、「子供の場合「から」を含む従属文は殆んど大部分が主文の次に来ているし大体年令の進むにつれて理由の「から」を用いる率がふえている」という論文と関係があり面白くおもわれた。

この論文では三十分間自由に子供達がしゃべるのを記録し分析してあるのですが、保育しながらの記録は無理なので、CATを使って話させたことを分析してみた。話をひっくりかえして理由を説明するものも多かった。五才児を中心とする年長組から二十人をアトランダムに選びCATを行った所、10枚の絵についてつくった話の中で理由の「から」を用いた頻数は、

7回が 2人

6回が 1人

3回が 3人

2回が 6人

1回が 4人

0回が 3人

で子供の創造から出た話の中ではたくさんは出て来ていないが、これを話の量と比べてみた。語数ではかることは特に幼児の場合語法上の問題が多いのでかなでかいたその字数と比較してみた(促音はぬかす)結果は次の通りでした。

理由の「から」の多い7回6回の3人と、その少ない0回の3人の比較

「から」の7回のもの 1775字(女) 1128字(男)

6回のもの 1229字(女)

0回のもの 472字(男) 639字(女) 1129字(男)

幼児の言語表現と繪画表現の関連

東京高等保育学校 内山 憲 尙

一
幼児の生活表現のうち、言語表現と繪画表現との間には非常に類

この6人の中、0の1129字の男はクラスの中でも知能の程度が低い方であとの5人は知能検査の結果からもふつう以上の子供である。

例が少ないので結論とまではゆかないが話の量、語い、の豊かな、想像力思考力に富んでいる子供に理由の「から」が多く、知能程度が低く、話の量の少ない、思考力想像力の貧しいものに、理由の「から」が少い傾向があるといえよう。

話の理解について考えるときは子供の思考活動の発達についてあわせて考えてゆかねばならないと思われる。

又記憶していることと理解したことについての関連についても更に研究しなければならぬと思う。これらについても考えあわせて、話の理解についての実験的な調査を継続し、こどもに聞かせる話の程度や段階の基準をどのように考えたらよいかについて研究したいと思っている。

似のものが存在するのである。結論的に言えば、言語表現と繪画表現との関連に於て共通的なものが大部分を占めているということが出来る。これは幼児の生活表現は一つは言語によってなされ、一つ